

トーマス・マンとマックス・ヴェーバーのアメリカン・ドリーム (前編)

山 室 信 高

目次

はじめに

1. 二人のローズヴェルト

2. 新世界より——アメリカの原像

参考文献

はじめに

1904年、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』の前半部を脱稿したマックス・ヴェーバーはセントルイス万国博覧会の一環で開催される「世界学会会議」に参加するため、妻のマリアンネや同僚のエルンスト・トレルチらとともにアメリカを訪れた。それからちょうど30年後の1934年にはトーマス・マンが『ヨセフとその兄弟』の第1部『ヤコブ物語』の英語版の刊行記念にニューヨークの出版社の招きに応じて、妻カーチャを伴いアメリカの地を踏む。まだ旅客空路が確立される前のこと¹⁾、両者とも大西洋をはるばる渡る船旅であった。ヴェーバーは北ドイツのブレーマーハーフェンから「ブレーメン」号に、マンはフランスのブローニュ・シュル・メールから「フォーレンダム」号に乗って、どちらも船中10泊の後、ニューヨークに入港する。ヴェーバーはそれから約2ヶ月半、セントルイスの会議で「資本主義と農業体制(Kapitalismus und Agrarverfassung)」²⁾について講演するにとどまらず、アメリカ各地を精力的に巡り、大いに見聞を広める。

1) しかしこの30年間で飛行機はアメリカを舞台に長足の進歩を遂げる。ヴェーバーの旅の前年、1903年にライト兄弟による世界初の動力飛行、1927年にリンドバークの「スピリット・オブ・セントルイス」号が単独・無着陸で大西洋を横断、そして1935年には今日の旅客機の先駆け「ダグラスDC-3」型機が登場する。飛行機の観点からのアメリカ史のユニークな叙述としては生井 [2006] を参照。ちなみにトーマス・マンは1935年のアメリカ旅行の際、F・D・ローズヴェルト大統領と会見するために、ニューヨークからワシントンへの移動に初めて飛行機に乗った(機種は不詳)。マン [1988]、192頁参照。

2) この講演はドイツ語で行なわれたが、ドイツ語原稿が失われたためにオリジナルのタイトルは不明である。

対してマンはこの時はニューヨークとその周辺に10日間ほど滞在しただけだったが、以後1938年までに4度もアメリカに赴き、このうち3度目は4ヶ月を超える旅行で、「来たるべき民主主義の勝利(Vom kommenden Sieg der Demokratie / The Coming Victory of Democracy)」³⁾という講演をしながら大西洋岸から太平洋岸までアメリカ大陸横断を果たす。さらに4度目はもはや尋常な意味での旅ではなく、結果的に14年間に及ぶアメリカ亡命生活となった。

本論はヴェーバーとマン両者にとってのアメリカ体験——ここで「アメリカ」と言ったとき、特に断りのない限り、アメリカ合衆国を指す——とその思想史的意味を比較検討しようとするものである。これまでの私の研究に照らすと、本論の問題設定はドイツ・ネーションをめぐるマンとヴェーバーの国民意識の比較を行なった論文⁴⁾(以下「ドイツ」論)および東方の大国ロシアに対する二人の親疎交々の観方を追跡した論文⁵⁾(以下「ロシア」論)に連なる。「ドイツ」論では第一次世界大戦下に先鋭化したマンとヴェーバーのドイツ人としての「自己意識」を問題視したのに対して、「ロシア」論ではこの二人のドイツ人にとってロシアが呈する「他者」としての存在意義を探ったわけだが、ここでは東から西へ目を転じて、アメリカというもう一つの巨大な「他者」がマンとヴェーバーの前にどのような姿をとって立ち現れ、そして両者のナショナル・アイデンティティにいかなる影響を及ぼしたのかを比較考察してみたい。

そもそもなぜマンとヴェーバーを比較するのかという疑問に対しては「ドイツ」論で弁明してあるのでここでは繰り返さないが⁶⁾、本論で扱う「アメリカ」というテーマに関して一言すれば、狭義のドイツ文学の枠内のマン研究や、方法的に区画整備された社会学におけるヴェーバー研究によってはアプローチしきれない広汎な面があり、そこに切りこむにはディシプリンの制限を超えて、両者を比較するという方途をとるのがよいと思われるからである。実際これまでもマン、ヴェーバーにとっての「アメリカ」について論じる場合——マンとヴェーバーを直接比較した例は見当たらないようだが——マンならばナチスドイツからの知識人・芸術家の「亡命」という環境の

英語訳のタイトルは「社会科学の他分野に対する農業共同体の関係(The Relations of the Rural Community to Other Branches of Social Science)」といい、この英語訳からドイツ語に訳し返されたもののタイトルが表記のものである。Weber [1984ff.] の全集 (MWGと略記し、巻数と頁数を記す) には英語訳が収録されている。Vgl. MWG I/8, 212-243.

3) こちらは基本的に英語による講演。ドイツ語版はMann [1974/1990] の全集 (GWと略記し、巻数と頁数を記す) に収録されている。Vgl. GW XI, 910-941. マンの著作は基本的にこの全集に拠るが、現在刊行中のMann [2002ff.] のコメント付き全集も適宜引用・参照する (GKFAと略記し、巻数と頁数を記す)。

4) 山室 [2000]、同 [2003]。

5) 山室 [2012]、同 [2013]。

6) 山室 [2000]、99-108頁参照。

中で、例えばベルトルト・ブレヒトやテオドル・アドルノなどと並べて⁷⁾、ヴェーバーの方は、古典的なアメリカ論『アメリカのデモクラシー』を著したアレクシス・ド・トクヴィルと照らし合わせる⁸⁾といったかたちで論じられてきた。そこで本論でも、やや変則的なペアではあるが、マンとヴェーバーを取り上げて、両者のアメリカの旅——直接に体験しているという点で二人が一度も訪れることがなかったロシアとは異なる——に付き添いながら、「アメリカ」という遠大な領野に迫ってみたい。本論にとって幸先のいいことに、近年——同じ2011年——マン、ヴェーバーそれぞれの「アメリカ」に関する包括的なモノグラフィーが出された。ハンス・R・ヴァジェ『アメリカ人トーマス・マン』とローレンス・A・スカッフ『アメリカのマックス・ヴェーバー』である。どちらもアメリカの研究者による、新資料を駆使しての充実した叙述であるが、どちらにおいても重んじられているのはマンないしヴェーバーが置かれたアメリカの歴史的コンテクストを吟味することである。⁹⁾ 以下でまずは私もマンとヴェーバーが旅したアメリカの歴史的な大枠を示しておこう。

1. 二人のローズヴェルト

ロシアと並んで、いやおそらくはそれ以上にアメリカはマンとヴェーバー——のみならず同時代の多くのドイツの知識人たち——の観念と思想に大きなインパクトを与えたと思われるが、それは何よりも19世紀から20世紀への世紀転換期以来、そして決定的には第一次世界大戦後に、アメリカがヨーロッパをしのぐ世界権力(world power, Weltmacht)として歴史の表舞台に躍り出てきたことによる。

東部13州の独立から100年余りにわたって、アメリカはいわゆる「明白なる天命(manifest destiny)」のもと、大陸を西進して領土を拡大し、南北戦争による分裂の危機を乗り越えた後は、重工業を中心とする著しい産業化を背景に幾筋もの大陸横断鉄道で東西を結び、1890年、ついに国勢調査により「フロンティア」の消滅が報告される。ここからアメリカはさらに海外へ進出し、カリブ海や太平洋に新たな「フロンティア」を求めて、1898年にはハワイを併合するとともに米西戦争を起こし、

7) 近年の代表的な研究としてBahr [2007] を参照。

8) オッフエ [2009] はヴェーバーをトクヴィルの他にアドルノとも比較している。ヴェーバーとアドルノの比較は、アドルノがマンと同時期にアメリカに滞在（亡命）していることから、本論の構想に近いところがあるが、オッフエも認めているように亡命者としてのアドルノはアメリカにあまり馴染まず、長く住んだにもかかわらずアメリカ各地を見て回ることもしなければ、アメリカに対する知的関心も希薄だった。同書、86-88頁参照。それに対してマンは——亡命者の中で例外的に——アメリカの生活に深くコミットしているという点で、ヴェーバーの旺盛なアメリカへの関心と見合い、比較対象としてよりふさわしいように思われる。

9) Vgl. Vaget [2012], S. 18; Scaff [2013], S. 11.

フィリピンやプエルトリコなど植民地を領有するに至り、ヴィルヘルム2世治下のドイツをはじめ列強との帝国主義的競争に乗り出す。ヨーロッパを主戦場とする第一次世界大戦には当初中立を保っていたが、ドイツが無制限潜水艦作戦を宣言するに及んで参戦し、勝利を収めた戦後は最大の債権国として国際秩序の再建・再編に取り組む（自ら構想を打ち出した国際連盟には結局加盟しなかったが、ドイツが負った戦後賠償のためにドーズ案やヤング案といった履行計画を策定し、ドルの資本力でドイツの経済復興に寄与する）。しかし1929年、ニューヨークの株価大暴落に始まる世界恐慌によってアメリカの経済的、それとともに政治的な牽引力は減退し、国内はもとより国際情勢は再び混乱していくが、アメリカはここに至って「ニューディール（新規巻き返し）」を試み、資本主義と民主主義をかうじて保持しつつ、全体主義国家のドイツや日本に立ち向かうことになる。

ヴェーバーとマンがそれぞれ訪れたのは、この世紀転換期と大戦間期のアメリカである。もちろんその間1世代ほどの開きはあるものの、後に「アメリカの世紀」¹⁰⁾と呼ばれることになる20世紀が当のアメリカ合衆国を中心に展開していくに際して、どちらも重要な布石が打たれる時期に当たっている。その立役者と言ってよいのが、時の合衆国大統領である二人のローズヴェルト、すなわちセオドア・ローズヴェルト(1858-1919)とフランクリン・デラノ・ローズヴェルト(1882-1945)である。¹¹⁾ よく知られているように、両ローズヴェルトは遠戚関係にある（またフランクリンはセオドアの姪のエレノアと結婚した）。二人ともニューヨーク州のオランダ系の名家に生まれ、家庭教師をつけられ、度々ヨーロッパへ旅行し、ハーヴァード大学を出て、政界に入り、ニューヨークの州議会議員を皮切りに、その時々の方権（セオドアはマッキンレー大統領、フランクリンはウィルソン大統領）下で海軍次官を務めた後、ニューヨーク州知事に当選、大統領へのエリートコースを歩んだ——前者は共和党、後者は民主党という違いはあったが。

20世紀が始まる1901年、マッキンレー大統領の暗殺により、副大統領だったセオドア（愛称テディ）・ローズヴェルトが第26代大統領に昇格する。彼は対外的には「フロンティア」消滅と米西戦争以来の帝国主義的路線をさらに押し進めながら、内政では大統領の権限を最大限に振るって、さまざまな思い切った改革を実行する。これらの改革はアメリカ史の上で「革新主義(Progressivism)」の名のもとに括られるが、その要点は急激に進展する産業と金融の資本主義化によって生じた一連の社会的な不公正を、連邦政府が積極的に関与・介入することで是正するということだった。「トラストバスター」の異名をとったほど、ローズヴェルトは巨大企業（J・P・モーガンのノーザン

10) 写真雑誌『ライフ』の創設者ヘンリー・ルースが1941年2月17日の同誌に載せた論説のタイトル。有賀 [2002]、1-2頁、174頁参照。

11) 以下、両ローズヴェルトの伝記や事績に関する記述は各種人物事典に拠っているが、特に猿谷 [2017]、102-107頁、128-133頁および松尾 [2017]、119-140頁、157-178頁を参照した。

・セキュリティーズやJ・D・ロックフェラーのスタンダード・オイル等）の独占の動きを規制するとともに、労働組合・労働運動の過激化を回避するため労使間調停に尽力する。また鉄道事業や食品製造業に見られた利用者・消費者に対する不利益をチェックする制度を整えたり、広大な「ナショナルパーク」の開設に見られるように、自然環境・天然資源の保護政策も打ち出したりした（ラッシュモア山国立記念公園の有名なモニュメントにワシントン、ジェファソン、リンカーンと並んで、やや地味ながらローズヴェルトの顔が刻まれているのはこのためもあろうか）。

マックス・ヴェーバーのアメリカ滞在はちょうどこのローズヴェルトが2期目を目指して大規模な選挙キャンペーンを展開している最中であった。意外にもヴェーバーは滞在中この大統領選について何も書き残していないのだが(vgl. MWG II/4, 14)、彼の注意を惹かなかったはずはない。メディア戦略に長けたローズヴェルトの文章や写真を連日の新聞報道で目にしていたにちががなく、その「カリスマ的指導者」としての資質や「人民投票的(plebiszitär)」な傾向を嗅ぎとっていたことだろう。¹²⁾ さらにローズヴェルトに代表される「革新主義」の一連のテーマはヴェーバーの学問的関心にアピールするものだった。先のスカッフによれば、「彼[ヴェーバー]の関心の対象をリストアップしてみると、その結果はアメリカの革新主義の本質的テーマのアジェンダのように読める」として、「移民とそのコミュニティ」、「階級と身分」、「労働・職業の政治経済論」、「住居および都市計画の問題」、「資本主義に関連する文化の問題」等々を列挙している。¹³⁾ 19世紀において基本的には古典経済学的な自由放任、また社会進化論的な適者生存の理念のもとで展開してきた資本主義の社会経済体制の諸矛盾を解決しないまでも、修正緩和するための総体的な営為が「革新主義」だったわけだが、その何よりもアメリカ的な特徴は「企業、政府、研究・教育機関が一体となって、科学的知識・技術を活用して、社会の発展を推進していくようなシステム」としての「知的探求体制」¹⁴⁾、今で言うところの産学官共同体の確立にあった。

ところでヴェーバーがアメリカを訪ねるきっかけとなったセントルイス万博および「世界学芸会議(World Congress of Arts and Sciences)」はまさにそうしたアメリカ式「知的探求体制」の一大エキシビジョンだった。セントルイス万博はもともとフランスからのルイジアナ植民地購入100周年を記念する催しだったことから、その国威発揚の意味は明らかだが、この100年間に遂げた産業および科学上の飛躍的な「進歩・革新(progress)」を政府や公共機関の協賛のもと披露するという

12) 後年ヴェーバーは「支配社会学」の「カリスマ」に関する段でローズヴェルトが再び咲きを目指した1912年の大統領選キャンペーンをカリスマ的指導と政党官僚制との対立の例として引いている。Vgl. MWG I/22-4, 506; Scaff [2013], S. 21, 200f.

13) Scaff [2013], S. 20.

14) 有賀 [2002]、75頁、76頁。

意味で、産学官が連携する「革新主義」的プログラムとして挙行された。¹⁵⁾「世界学芸会議」の方も単に万博に花を添えるアカデミシヤンの宴ではなく、その主催者の一人の企図するところ「この会議はこの万博が進歩の幹線道路の上に築いた山の頂である。その高みからわれわれは過去を振り返り、現在を記録し、未来を見つめるのだ」¹⁶⁾ というように、万博の「進歩」の理念の最高度の実現を期すものだった。そうして7つの部門(division)、24の部局(department)、130の分科(section)から成る、大掛かりな会議の計画が練られる(vgl. MWG I/8, 202)。「世界」と銘打ちながらも、もっぱらヨーロッパから多くの学者が招待され、そのうちドイツがもっとも多かった(vgl. MWG I/8, 203, Anm. 28)。これはハーヴァード大学の心理学教授で、当会議の組織運営委員であったフーゴー・ミュンスターベルク(1863-1916)の尽力によるところが大きい。ミュンスターベルクはもともとフライブルク大学でヴェーバーの同僚だったこともあり、その人脈を生かして、ヴェーバーやトレルチをはじめ多くのドイツ人学者たちの会議参加を取りつけた。ミュンスターベルクの用意したプログラムに従って、セントルイスの会議に至るまでのアメリカ旅行の前半はナイアガラ瀑布を見学するなど参加者一行と連れ立っていたヴェーバーだったが、会議後は一時マリアンネとも別れて別行動をとる。本来ならば首都ワシントンで大統領主催のレセプション¹⁷⁾ に出席するはずだったのが、急遽キャンセルして、オクラホマ州のインディアン居住地、そしてアラバマ州タスキーギーの黒人教育施設に向かったのである。ヴェーバーがドイツ語をよくしたというセオドア・ローズヴェルトと直接会ったとしたらどうだろうかと想像してみたくはなるが、大統領のレセプションによってフィナーレを迎える「世界学芸会議」が顕揚したアメリカの「革新主義」および「知的探求体制」の表向きのオフィシャルな面に対して、ヴェーバーはネイティヴ・アメリカンや黒人といった、いわば「革新主義」の内側で周縁に追いやられた存在に関心を寄せたのであった。

1929年に始まった大恐慌に対して有効な手立てを講じえなかったフーヴァー大統領に替わって、1933年——ヒトラーがドイツの政権を掌握したのとほぼ同時——にフランクリン・D・ローズヴェルト（通称FDR）が第32代大統領に就任する。このローズヴェルトが掲げた「ニューディール」は、セオドア・ローズヴェルトが自身の諸政策を指して「スクエアディール」と呼んだことを多分に意識した標語のように思われるが、実際、大恐慌によって未曾有の危機（1933年の失業率25%）に

15) セントルイス万博の会場図を見ると、中央部の「電気と機械」、「鉱山と冶金」、「輸送」、「教育と社会経済」、「リベラルアーツ」などの大型パビリオンの他、その脇に広がる連邦政府と諸州の会場、また諸外国に比べて植民地フィリピンのためのひと際大きい敷地が目につく。Vgl. <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/saint-louis1904/0014/image>

16) Rollmann [1993], p. 359.

17) レセプションの様子とローズヴェルトの歓迎の辞は、vgl. Scaff [2013], S. 92f.

陥ったアメリカ経済および社会を建て直すのに、中央政府の権限を高め、多くの専門家をブレーンとして登用し、産業の統制と振興を図る「ニューディール」の方式はセオドアの時代の「革新主義」の産学官「知的探求体制」を一層強化したものだと言える。「かつてのセオドア・ローズベルトの夢はフランクリン・ローズベルトの代になって実現した」¹⁸⁾と言われる所以である。FDRはAAA（農業調整法）、NIRA（全国産業復興法）、TVA（テネシー川流域公社）、CCC（民間資源保存団）、WPA（事業促進局）等々、アルファベットの略称で呼ばれるいくつもの法律や機関を設けて、「ニューディール」を大々的に遂行していくが、それらが実際どれほどの効果を上げたのかはさておき、彼個人に対する国民の支持は絶大だった。1936年の選挙ではFDRは共和党候補を寄せ付けずに圧勝し（「ローズヴェルト連合」と呼ばれる支持層の再編拡大）、さらに1940年にはセオドアも成せなかったアメリカ史上初の大統領3選を果たす。セオドアもそうだったが、FDRにもカリスマ的な魅力があり、例えば「炉辺談話(fireside chats)」と呼ばれるホワイトハウスの執務室からのラジオ放送では持ち前の美声で国民に親しく語りかけた。その人柄あふれる語り口に慰められ、勇気づけられた人々の証言には事欠かない。¹⁹⁾

トーマス・マンも「自然が彼に恵んだすばらしい声」(GW XII, 943)と讃えているように、フランクリン・ローズヴェルトの人間的魅力に感化された一人だった。マンはしかし新聞やラジオでFDRの言動に接していたというだけではない。彼は大統領本人に、しかも3回も会っているのである。まずはハーヴァード大学から名誉博士号を授与されるのに再度渡米した際、思いがけずホワイトハウスに招待されて（1935年6月29日）、次に亡命後まもなく、ワシントンの新聞社団体が主催するディナーパーティーの席上で（1939年4月15日）、そして最後に、これはマンの方からの働きかけがあって実現したホワイトハウス2泊滞在の折に（1941年1月14日）。いずれの出会いの時もマンはローズヴェルトの人好きのする笑顔——「アメリカ的な笑い (amerikanisches Lachen)」²⁰⁾——やもてなし上手な話しぶりに接して好意を抱くのだが、特に2回目のパーティーではローズヴェルトがボディガードに支えられながら車椅子から立ち上がり演壇に上がる痛々しい様子を見て、大きな感銘を覚えている。²¹⁾ よく知られたエピソードだが、ローズヴェルトは政治家としてのキャリアを着々と歩んでいた途中に小児麻痺に罹り、下半身不随となり歩行できなくなる。一時は政治生命も尽きたかと思われたが、必死のリハビリで政界に復帰したのみならず、大統領にまでなったのである。マンはこのことを知らなかったわけではない。最初の会見の際も車椅子のローズヴェルトを目にしている。しかし「ここで初めてトーマス・マンは常に自信とオプティミズムを発散するFDR

18) 松尾 [2017]、176-177頁。

19) 同上書、169-170頁、また有賀 [2002]、151頁、154頁参照。

20) マン [1988]、194頁。

21) マン [2000]、621頁参照。

の装いの下に身体をひどく病んだ人間フランクリン・ローズヴェルトを見てとった」²²⁾。こういう人間的な弱さも含めてマンは「世界でもっとも強力な男(der mächtigste Mann der Welt)」(GW XI, 982; XIII, 771)であるローズヴェルトに身近に接したのである。

このことはもちろんまた、個人的な共感のレベルを超えて、アメリカの権力の中枢との接触であった。特に3回目の、ホワイトハウスでの会談はその感が強い。その日の日記に「大統領の占める権力と重要性を思えば、その隣にすわることは大変興味深い」²³⁾と書き留めているように、マンもこのことは自覚している。1941年1月14日と言えば、3選を果たしたFDRが就任演説に臨む1週間前である。ヨーロッパで第二次世界大戦が始まって1年余り、アメリカはまだ参戦していないが、FDRが「民主主義の武器庫」としてのアメリカの役割を宣明し、「武器貸与法」を成立させるなど、中立政策から徐々に戦時体制へと移行していく時期に当たっている。マンはこのタイミングを見計らったように、ホワイトハウスを訪れ、戦争を視野に入れ始めたFDRに「合衆国および来たるよりよき世界の大統領フランクリン・D・ローズヴェルトへ心底からの賛嘆の控えめなしとしして」²⁴⁾という献辞を添えて、自身の講演録『戦争と民主主義(War and Democracy)』を贈呈する。FDRがこの講演を読んだとは思えないし²⁵⁾、また読んだとしてもそれが彼の政策に何らかの影響を及ぼしたともまず考えられないが、そこで論じられている民主主義における「自由」という難問、そしてその解決のための「自由」の自主規制・自発的譲歩としての社会民主主義の要請はFDR政権の「ニューディール」構想に適うものであった。さらに今次の戦争はアメリカにとってもはや対岸の火事ではなく、「精神的、倫理的、イデオロギー的な意味においてばかりではなく、生命力にかかわる意味で重大な関心事」²⁶⁾であるはずだとして、「世界内戦(World Civil War)」——「南北戦争(Civil War)」の世界版——の意義が強調されている。マンにしてみれば、3期目に臨むFDRへの精一杯のアピールだったのだろう。それが通じたかどうかはいざ知らず、「ニューディール」はここに至って、軍需の勢いを得て一挙に所期の成果を達成する。「革新主義」の「知的探求体制」は産学官に加えて「軍」という機構も取り込んで一段と強力になり、アメリカはFDRのもと戦闘態勢を整えていく。

マックス・ヴェーバーとトーマス・マンは「アメリカの世紀」としての20世紀をリードしていく二人のローズヴェルト大統領にそれぞれ出会った——ヴェーバーは間接的・象徴的な意味で、マン

22) Vaget [2012], S. 93.

23) マン [1995]、329頁。

24) Kurzke [1999], S. 471.

25) マンはFDRが自分の作品を読んでいないことを残念に思っていた。Vgl. Vaget [2012], S. 84. その点、セオドア・ローズヴェルトは読書家・著述家で、文学にも親しんでいたので、マンとも話が合ったかもしれない。

26) マン [1995]、1056頁。

は直接的・人格的な意味で。そこには30年の時代の隔たりはあるが、セオドアの「スクエアディール」とフランクリンの「ニューディール」はともに「革新主義」的な改革プログラムとしてこの二人の政権を時代を超えて結びつける。ヴェーバーもマンも当初の予想以上にこのダイナミックな「革新主義」の時代潮流に身を浸すことになったのだが、それは大統領という時代の潮目に——ヴェーバーはいくぶん批判的な距離をとって、マンは至極友好的に——接近したからであった。両者のアメリカ旅行は二人のローズヴェルトの広範な影響圏の中で展開されたのである。

2. 新世界より——アメリカの原像

実際にアメリカを訪れる前、マンとヴェーバーにあって「アメリカ」はどのようにイメージされていたのか。その源を探っていくと、両者とも近い家族に行き着く。

トーマス・マンの場合は母親である。母ユリア・マン(1851-1923)はアメリカ、といっても北アメリカではなく、南アメリカはブラジルに生まれた。彼女の父親、すなわちトーマス・マンの祖父に当たる商人ヨハン・ルートヴィヒ・ヘルマン・ブルーンズ(1821-1893)は若くしてブラジルに渡り、リオデジャネイロ近郊でコーヒーと砂糖のプランテーション経営者として財を成し、現地のポルトガル植民者の娘 MARIA・ダ・シルヴァ(1828-1856)と結婚して、ユリアら5人の子どもを儲ける。ユリアは7歳までブラジルで暮らした後、母の早世を機に、父の生地リュベックに移り住むことになるが、そこで初めて雪を見て砂糖だと思ったというエピソード(vgl. GW XI, 421)²⁷⁾からも窺えるように、幼いなりに少なからずカルチャーショックを覚えたようである。それだけにブラジルでの日々は彼女にとって幸福な記憶となったのだろう、後年、自分の子どもたちにその思い出話を好んで語り聞かせた。トーマスの回想によれば、「母はわれわれ子どもたちにリオの入り江の楽園のような美しさについて、また彼女の父親の農園に現れて黒人奴隷たちに棒で叩き殺された毒ヘビについて語ってくれた」(GW XI, 420f.)²⁸⁾。ユリア自身の手になる『ドードーの小さい頃から』(1958)には、当時「ドードー」という愛称で呼ばれた彼女の「海と原生林の間」²⁹⁾での生い立ちが次のように描かれている。

5人の子どものうちドードーは4人目で、パイ「パパ」のようにブロンドで軽く波打つ髪をした

27) Vgl. auch Mann [1991], S. 25.

28) トーマスの弟のヴィクトールも同様の話を、こちらはもっと詳しく伝えている。「ママは僕によく当時のことを語ってくれた。パイナップルの並木道のこと、スコール、黄熱病、教会のお祭りやリオの盛大なカーニヴァルのこと、そして一度農園の道のまん中に寝そべっていた巨大な王蛇(Boa)がアンナ [ユリアの乳母] の悲鳴を聞いて駆けつけた黒人たちによってこん棒で叩き殺されたことについて」。Mann [1994], S. 18.

29) Mann [1991], S. 7.

唯一の子でした。[…] その子はマイ [ママ] のそばに多くいましたが、黒人のアンナやムラート [黒人と白人の混血] のレオカディアの世話にもなっていました。帯で結わえた肌着をつけて裸足でかけずり回り、海岸に飛び出して行っては岩から貝や小さな牡蠣を引っぺがして、あぶるのに家のかまどに持ち帰ったり、家の裏手の原生林のとば口に行っては落ちたココナッツやバナナを拾い集めたりしました。[…] そして原生林からはほとんど絶え間なくホエザルとオウムの大きな鳴き声が響いていました。³⁰⁾

もちろんここに描かれている光景や風物は南米ブラジルのそれである。しかしトーマスはじめ子どもたちが母ユリアの口から語られるこれらの話に耳を傾けたとき、どこまで「ブラジル」という特定の国を意識していただろうか。ユリアの手記は多分に彼女の語り口を写しとっていると思われるが、そこに強く感得されるのはエキゾチックな情緒であり、メルヒェンの調子である。ドイツ語で言うところの“Fernweh”、すなわち「遙か彼方の地への憧れ」が冒頭の一文から醸し出される。「ドードーが初めてこの世の光を見たのは、赤道の南、大西洋の畔にある原生林の中でした」³¹⁾ とごくおおまかに描かれるだけで、「ブラジル」という地名は挙げられない（後に数回「リオ」の名は出てくるが）。これは「昔々あるところに…」というメルヒェンの流儀でもある。ユリアは子どもたちにペローやグリムのメルヒェンをよく語り聞かせていたが³²⁾、彼女自身の思い出話もどこか遠く、大海の果ての原生林で、「ドードー」という野生児のような女の子を主人公にした一つのメルヒェンに他ならなかった。

ただ「ブラジル」が名指しされないかわりに、ここでは「アメリカ」とも言われないので、ユリアの昔話をトーマス・マンにとってのアメリカの源泉と見ることはやや無理があるかもしれない。しかしマンの後の芸術創作を参照すると、アメリカとのつながりが確かめられる。

小説『ブッデンブローク家の人々』(1901)の主人公トーマス・ブッデンブロークの弟であるクリスチアン・ブッデンブロークは一人前の商人になるためにしばらくロンドンの商会で修業を積むが、あまり身が入らず、「活発な放浪癖 (lebhaftes Wanderlust)」に駆られて、『『向こう (drüben)』、すなわち南アメリカ、おそらくチリに」職を求めようと、「1851年の夏に […] 本当にヴァルパライーゾへ船で渡って行った」(GW I, 238; GKFA 1.1, 259)。ヴァルパライーゾはチリ最大の港町で、ブラジルで言えばリオデジャネイロに相当し、1851年はちょうどユリア・マンが生まれた年である。³³⁾ それから

30) Ebd., S. 8.

31) Ebd., S. 7.

32) Vgl. Wysling / Schmidlin [1994], S. 46.

33) トーマス・マンは母の生地をリオデジャネイロと勘違いしているようだが、実際はリオとサンパウロの中間辺にあるパラティという小さな港町である。Vgl. Strauss / Sene [1999], S. 19f.

数年後、ユリア同様に、クリスチアンも2ヶ月の航海を経てリュエバックに到着し(vgl. GW I, 253; GKFA 1.1, 276)、ヴァルパライゾの話に家族に生き生きと語り聞かせる。「彼自身その場に居合わせた殺人・撲殺の事件」、「エキゾチックな暴力性」に満ちた「ナイフとピストルの話」(GW I, 271; GKFA 1.1, 296)は先のユリアの大蛇殺しのエピソードを思い起こさせる。ブラジルとチリ、またユリアにおける牧歌的な閑静さとクリスチアンのエキセントリックな奇怪さとの違いはあれ、南アメリカという遙かな地のエキゾチシズムはどちらにも共通している。しかしここでもまだ北アメリカないしアメリカ合衆国とのつながりは見えない。ただ、クリスチアンはロンドン滞在のおかげで「風貌全体がどこかイギリス的なもの(etwas Englisches)をまとっていた」(GW I, 261; GKFA 1.1, 285)と言われる。彼はまた英語もよくし(vgl. GW I, 238; GKFA 1.1, 259)、仕事では「英語による通信(englische Korrespondenz)」(GW I, 267; GKFA 1.1, 291)を兄から任され——少なくとも初めのうちは——首尾よくこなした(vgl. GW I, 270; GKFA 1.1, 295)。このようにイギリス風の身のこなしと英語の才能を持ったクリスチアンならば、ロンドンからチリにではなく、アメリカ合衆国へ渡る方がより自然な成り行きだったように思われるのだが、そうならなかったのはおそらくユリアの「秘かな『南』への、芸術への、もっと言えばボヘミアンへの性向」³⁴⁾の投影だろう。『トーニオ・クレイガー』(1903)に典型的に示されているように、マンの心象地理においては「南」の方位は「芸術」、しかもボヘミアン的な芸術家気質と密接な相関を成している。ピアノが実際上手だったユリアに対して、クリスチアンは真似事ながら迫真的な「ピアノの名人」芸を披露し、「芸術家であることは実にすばらしい！」(GW I, 264; GKFA 1.1, 288)などと感に堪えない様子を見せる。彼はこうして北ドイツの地で手堅い商業を営むブッデンブローク家に南方から気儘な芸術の気風を持ちこみ、ゆくゆくは家族と商会の没落に一役買うことになる。クリスチアンがもしイギリスからアメリカ合衆国へそのまま西進していたとしたら、彼のこの役回りは半減していたことだろう。ただ彼のピアノの擬似演奏が「おどけた、エキセントリックなイギリス・アメリカ的(englisch-amerikanisch)性質」(GW I, 264; GKFA 1.1, 288; 傍点は引用者)の滑稽味を湛えていたという点は、これを通常の語法どおり「英米的」と読むか、あるいは物語のコンテクストに沿ってこの「アメリカ」を「南アメリカ」と解するか、判断に迷うところである(ちなみに岩波文庫版では「英国—米国のエクセントリックな感じ」と訳されている)。いずれにせよ『ブッデンブローク家の人々』においてアメリカは「大西洋の彼方に(transatlantisch)」(GW I, 273; GKFA 1.1, 298)広がるエキゾチックでエキセントリックな大陸であり、遠方への憧憬をかきたてる土地柄ではあるのだが、それ以上に具体的なイメージは希薄であり、少なくともここで注目しているアメリカ合衆国の表象は見えてこない。³⁵⁾

34) Mann / Meyer [1992], S. 163.

35) クリスチアンの母方の従兄で、これも放蕩者のヤーコプ・クレイガーがニューヨークに渡って、その後

それはしかし次の長篇『大公殿下』(1909)でにわかに前面に出てくることになる。『大公殿下』はマンの作品の中でもっともマイナーと言っていいほどに、従来の批評や研究において冷遇されてきた小説だが、マン自身からすれば満を持して、すなわち意外の幸運にも恵まれてヒットした初の長篇『ブッデンブローク家の人々』の後を受けて、小説家としての確かな実力を証明するべく持てる材料と技量の限りを尽くして書き上げた第二長篇であった。このことは6年余りの比較的長い創作期間と、その間の構想の変化や度々の改稿の様子から十分に窺うことができるが、この小説の「アメリカ」モチーフに関して言えば、ごく初期の構想の段階からすでに「アメリカの金持ち」や「アメリカの億万長者」(GKFA 4.2, 338, 346)という言い方で、主人公の君侯貴族に対して相手役を務める人物の姿が現れてくる。また構想上の大きな変化をもたらし、小説の主たる自伝的要素を形づくることになる作者マンと後の妻カーチャ・プリングスハイムとの出会いの時期には、マンは作家仲間と次のようなやりとりを交わしている(1904年春、創作ノートへの書きこみ)。

M [クルト・マルテンス] は私が君侯と芸術家の類比を持ち出したとき、私に向かって今日の君侯の興味深さを否定した。モーガン(Morgan)やヴァンダービルト(Vanderbilt) [ママ]の方が、民衆にとっても、より興味深い存在だという。[...] ドイツの君侯はモーガンなどよりも自身を本質的により高い、より高貴な、より例外的な存在と感じる権利がある。もしそうでないなら、彼はブルジョアだ。(GKFA 4.2, 349)

ここには友人との意見の対立を通して、『大公殿下』の主人公クラウス・ハインリヒの位置づけが模索されているが、そこで言及されているジョン・ピエポント・モーガン(1837-1913)、コーネリアス・ヴァンダービルト(1794-1877)はどちらも当代のアメリカを代表する大実業家・大資本家であり、前者は金融と鉄鋼、後者は船舶と鉄道の事業で巨万の富を築いた。マンがこれらアメリカの大富豪の名前をノートに書き留める少し前に、このJ・P・モーガン、そしてコーネリアスの孫のウィリアム・K・ヴァンダービルトは皇帝ヴィルヘルム2世の招きに応じてドイツを訪れている。³⁶⁾ ドイツの宮廷とアメリカの財界の接近——これは『大公殿下』の重要なプロットになる——はそれなりにマンの耳目を引いたと思われるが、上のメモの調子からもわかるように、この時点ではまだ「アメリカの金持ち」に対して距離をとっていて、「モーガン」は代名詞の域を出ないし、しかも「ヴァンダービルト」はつづりを間違えている(vgl. GKFA 4.2, 45, 47)。しかしその後しばらくして、マンは本格的に「アメリカ」モチーフに取り組むようになり、「アメリカの金持ち」の形象の彫琢に努める。

行方知らずになるのもアメリカの不在を示唆していようか。Vgl. GW I, 237, 398, 543; GKFA 1.1, 258, 437, 598.

36) 山口 [2006]、267頁、287-288頁参照。

「サミュエル・デイヴィス」(GKFA 4.2, 414)という名前が与えられ（最終的には「デイヴィス」から「スパーマン」へ変更）、アメリカにおける上流階級の暮らしぶりのディテールが調べられる(vgl. GKFA 4.2, 359f., 433f.). 加えてマンはいくつか資料も読みこみ、その中にはアンドリュー・カーネギー(1835-1919)の『ビジネスの帝国』のドイツ語訳があった(vgl. GKFA 4.2, 360f.). このカーネギーもモーガン、ヴァンダービルトに匹敵する大実業家で、特に石油と製鉄で財を成し、「鉄鋼王」の名でアメリカのビジネス界に君臨するが、1901年にモーガン商会に自社を売却して第一線から退くと、カーネギー財団を設立し、図書館やコンサートホールの建設など数々の慈善事業に余生を捧げた。マンは一方でこのカーネギーをはじめアメリカのいわゆる“self-made man”をモデルにしながら、他方で新妻カーチャの父アルフレート・プリングスハイムとプリングスハイム家の生活も身近に観察して、サミュエル・スパーマンの人物を造形していった。

『大公殿下』でサミュエル・スパーマンの名前は、主人公クラウス・ハインリヒとその兄妹が自分たちや公国についてあれこれ話し合っているところに闖入する一人の女官からやにわに告げられる。「スパーマン […] 大スパーマン、巨人スパーマン、アメリカのとてつもないサミュエル・N・スパーマン！」(GW II, 149; GKFA 4.1, 164f.)がわれらが公国にやって来ると、噂好きな女官は興奮冷めやらないといった調子で、このアメリカの大金持ちが訪れる理由やアメリカにおける彼の社会的地位について聞いたこと、読んだことあらいざらいを主人公たちに伝える。それによれば、スパーマンは持病の腎石の治療のために公国の鉱泉の薬効を目当てに来訪すること、また彼は「鉄道王(Eisenbahnkönig)」(GW II, 152; GKFA 4.1, 167)であるばかりでなく、鉄鋼、砂糖、石油などあらゆる産業のトラストに関与し、大株主として日々とてつもない配当金を手にしていること、だがサミュエル自身は単なる跡取りでしかなく、これらすべては彼の父親の仕業であること、そしてサミュエルはこのドイツ人の父親が南方の「クレオール血」を持つ女性と成した「混血児(sujet mixte)」(GW II, 153; GKFA 4.1, 168)であるということも事情通の女官は話して聞かせる。彼女の話は後に公国の御用新聞“Eilbote”「急使」が詳細に報じることになる。ドイツのしがない帳簿係だったサミュエルの父はまずオーストラリアのヴィクトリア州で金鉱を掘り当て、次に南アメリカのボリビアに渡って金鉱業を営み、そこで「その地の支配的な偏見を顧みずに反抗的に」(GW II, 186; GKFA 4.1, 205)結婚し、最終的にはペンシルベニア州のフィラデルフィアに移住し、鉄道に投資、石油を採掘、製鉄に進出して、「年収1200万ドル」を稼ぐ「鉄鋼トラスト」(GW II, 187; GKFA 4.1, 206)の大物にのし上がった。サミュエルはこの父の跡をそのまま継いだ、とはすなわち財産や地位だけでなく、父が生前に受けた恨みつらみも継いだのであり、それを宥めるためにサミュエルは高等教育機関や図書館などに多額の寄付を行なっているという(vgl. GW II, 187f.; GKFA 4.1, 207)。先のカーネギーの一代記を二代に分けたようなスパーマン親子の人生の軌跡であるが、気になるのはここでも『ブッデンブローック家の人々』のクリスチアン同様に、やや不可

解な曲折が見られることである。サミュエルの父がドイツからオーストラリアに一攫千金を狙って渡ったのはよいにしても、なぜそこから直接アメリカに行かずに南米のボリビアに寄ったのか、そしてなぜそこで「クレオールの血」を引く女性と強引に結婚したのか——いろいろ理由は考えられようが、やはりトーマス・マンの母ユリアの影をここにも見ないわけにはいかない。クリスチアンの場合はチリだったが、スパーマンの父はボリビアということで、ここでもまたユリアのブラジルから少しずらされているものの、この父がフィラデルフィアに移ったのが「[18] 50年代」(GW II, 186; GKFA 4.1, 205)のこととされているので、ボリビア滞在は1840年代から50年代にかけてと考えられ、これはユリアの父がブラジルに滞在していた時期とだいたい一致し、サミュエルが生まれたのもユリアと同じ1850年頃と想定されよう。そして何よりもサミュエルがドイツ人の父と「クレオールの血」が流れる「土着の母」(GW II, 153; GKFA 4.1, 168)の間に生まれた子であることは、ユリアと酷似している。「クレオール」というのは主に南米植民地におけるヨーロッパ系移民の子孫を指すので、ブラジルのポルトガル系植民者の娘であったユリアの母もクレオールに当たる。そしてこの母はサミュエルの「土着の母」同様に早世してしまうのである。スパーマン父子のボリビアの逸話は作者マンの母にまつわる自伝的要素を投影したものであると言える。ついでに言えば、サミュエルがオルガンを嗜む(vgl. GW II, 188; GKFA 4.1, 207)のもユリアがピアノをよくしたことを想起させる。³⁷⁾

最後に、こうした自伝的な背景を持つスパーマンの形象が『大公殿下』という小説において果たしている機能は何かと問うならば、決まって指摘されていることだが、「メルヒェン」のそれである。『大公殿下』は20世紀初頭のドイツのある公国を舞台とする現代小説ではあるが、随所にメルヒェン的なモチーフやイメージが織りこまれており、スパーマンとその一族もメルヒェンの舞台装置になっていることは見やすい。先のおしゃべりな女官がサミュエル・スパーマンを「海獣レヴィアタン、怪鳥ロック」(GW II, 151; GKFA 4.1, 166)になぞらえるところから始まり、サミュエルの娘のインマ・スパーマンが主人公クラウス・ハインリヒと結ばれる大団円に至るまで、救済メルヒェンのパターンを踏んでいるが、そこにこの小説ならではの色合いを与えているのが「アメリカ」である。つまりスパーマン家を核とするこの小説の「アメリカ」モチーフはメルヒェンの枠組の中で機能しているのである。アメリカの「鉄道王」の箱入り娘、「地球の裏側に住む人々(Gegenfüßler)のもとからやって来た、色とりどりの血が混ざった […] おとぎの国の王族の子、妖精の子、言葉のもっとも特別な意味での姫君」(GW II, 295; GKFA 4.1, 324)と貧窮する公国の孤独な

37) ところでスパーマンの娘インマは自分には「インディアン血(indianisches Blut)」(GW II, 265; GKFA 4.1, 291)が流れているとクラウス・ハインリヒに語る。これは厳密に言えば「クレオールの血」とは異なり、ネイティヴ・アメリカンとの混血(南米ではいわゆる「メスティーソ」)を意味する。Vgl. GKFA 4.2, 284f., 466f. こうしてスパーマンの出自にはよりアメリカ的な要素が付与された恰好になる。

王子が結婚し幸福になるだけでなく、この王の莫大な財力によって国そのものも救済されるという仕組みである。もちろんこうした紋切り型の「アメリカ」モチーフをメルヘンに仕立てることの安易さをマンは自覚していたし、それゆえに上で見たように「アメリカの金持ち」のリアリスティックな造形のために入念な準備と細部への配慮を行なったのであるが、それでも大枠として「アメリカ」のメルヘン性を利用したことは否定できない。³⁸⁾『大公殿下』は作者自身の母の出自という自伝的要素をさりげなくディテールに取り入れながら、母がその昔語ってくれた大海の果ての夢幻郷＝「アメリカ」という名のメルヘンを語り直した小説であった。

トーマス・マンが母親から新大陸発のメルヘンを夢見心地に聞いていた頃、マックス・ヴェーバーのもとには父親を通じてアメリカがやって来る——喩えて言うなら、線路を走って。ヴェーバーの父マックス・ヴェーバー(1836-1897)は、1883年9月、ノーザン・パシフィック鉄道のセントポール／ミネアポリス～ポートランド／シアトル間の開通記念運行に招待されて、ドイツ代表団の一員としてアメリカに渡った。³⁹⁾これはこの北西部にヨーロッパからの入植者と資本を募るために、ノーザン・パシフィックの社主ヘンリー・ヴィラードが企画したキャンペーンだった。父マックスはドイツ銀行の頭取ゲオルク・ジューメンズや後に『アメリカの共和国』を著して有名になるジェームズ・ブライスらとともに1ヶ月にわたる汽車の旅をし、当時の大統領チェスター・アーサーや南北戦争の北軍司令官で元大統領のユリシーズ・グラントに会見したばかりでなく、スー族やクロ族といったネイティブ・アメリカンと触れ合う機会もあった。息子マックスは「父さんたちの滞在について僕たちは新聞を通じて必要なことを知ることはできますが、航海に関して、カップ博士の計算によれば次の金曜日に僕たちの手に届くはずの、父さんの最初の手紙をとっても心待ちにしています」(MWG II/1, 353)と旅先に書き送っているが、父親からの返信が失われてしまったために、ヴェーバーが父の旅行について具体的に何を聞き知ったのかは残念ながらよくわからない。ただ若きヴェーバーの関心のありようとして、同じ手紙に国民経済学者グスタフ・シュモラーによる「1860-1865年の合衆国の国民経済の発展」(MWG II/1, 352)に関する論文を興味深く読んでいるといった記述もあることから、南北戦争以来のアメリカの驚異的な産業化——それは鉄道網の整備と不可分——に目が向いていることは注目に値する。そしてこれは少なくとも「[...] このところ大いに北アメリカ合衆国の歴史に取り組んでいます」(MWG II/1, 201f.)と従兄宛ての手紙（1879年10

38) 山口知三はこの辺の事情を分析して、「当時のドイツ人が『アメリカ』に対して抱いていた親近感と疎遠感、当時のドイツ人にとって『アメリカ』が持っていた現実性とメルヘン性といった二重性を巧みに利用した、このあざといまでの技法」と述べている。山口 [2006]、286頁。

39) 以下の記述は、Roth [2001], S. 483-485を参照。このS. 481にはドイツからの招待客のリストが転載されており、下から4人目に「政府高官マックス・ヴェーバー」の名が見える。

月11日付)に記した少年時代からの持続的な関心であった。

また上で言及されている「カップ博士」ことフリードリヒ・カップ(1824-1884)は1848年の革命に挫折後、アメリカに亡命し、20年間ニューヨークで暮らした後にドイツに舞い戻り、国民自由党の代議士となって、ヴェーバー家と家族ぐるみの親交を結んだということから、マックス・ヴェーバーのアメリカへの関心を最初に惹起したと思われるキーパーソンである(ちなみにその息子のヴォルフガング・カップは「カップ一揆」で有名)。父ヴェーバーがノーザン・パシフィック鉄道の開通記念行事へ参加したのもこのカップの手引きによるものだが、それよりもだいぶ前、1875年のクリスマスに、カップは彼自ら序文を寄せたベンジャミン・フランクリンの『自伝』(ドイツ語版)⁴⁰⁾を11歳のヴェーバーにプレゼントしている。ベンジャミン・フランクリン(1706-1790)は言わずと知れたアメリカ「建国の父(Founding Fathers)」の一人、そして100ドル紙幣の顔にもなっている代表的アメリカ人の一人で、ヴェーバーとの関係で言えば、後に——アメリカ旅行の直前に——『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』で「資本主義の精神」を体現する歴史的範例として引かれることになる。カップがその『自伝』の序文に「誰でもドイツの父親は自分の息子にフランクリンの自伝を読本、教訓書として与え給うことを！」と書いているように、ヴェーバーにとってカップはまさに父のような存在であった。カップがノーザン・パシフィック鉄道開通の翌年に急逝したとき、ヴェーバーはその死を悼んで伯父への手紙(1884年11月8日付)にこう書いている。

カップとの付き合いは […] いろいろな点でとても貴重でした。まず何よりもカップは驚異的な量の知識と経験を獲得していただけてでなく、その非凡な記憶力によっていつでもそれらの知識や経験を持ち出す用意があり、常にふさわしい時にもっとも適確に、そしてしばしばあっと言わせるようなしかたで利用することを心得ていたからです。彼のもとを辞去するときはほぼ決まって本質的に高められたように感じたものです。[…] 特に私にとって […] 彼が波瀾に富んだ人生のなかで接したたくさんの境遇について語るのを聞くのは、いつだって実にさまざまな方面へ駆け上がり立てるこの上なく効果的な刺激でした。[…] われわれ全員にとって貴重だったのはこのようにあらゆる点で愛すべき人物との触れ合いでした。はつらつとして、非常に若々しく、話し方がアメリカ的に無遠慮で(amerikanisch derb)、時に彼を知らない人はまさにそれで気を悪くするくらいに無遠慮で、まるでそこに居合わせた老人たちをもう一度学生時代へと連れ戻してしまうかの

40) この本は「1875年のクリスマスに親愛なる若き友マックス・ヴェーバーへ、年長の友フリードリヒ・カップ」という献辞つきで、ミュンヘンにあるバイエルン科学アカデミーの『マックス・ヴェーバー全集』編集所のヴェーバー蔵書に保存されている。Vgl. Roth [2001], S. 478.

ようでした。彼は自分から欲することなくたいていすぐに社交の中心の一つになり、もっとも活発な分子でした。要するに彼の死はあらゆる点でとても辛い喪失です。(MWG II/1, 468f.)

若きヴェーバーがカップの人柄や才能に魅了されていたことがよくわかる。そしてそこにはカップの率直な物腰にも表れるアメリカでの豊富な経験と思索が大いに関与していたことも容易に見てとれよう。上の手紙の続きではカップの遺作となった『ドイツの出版業の歴史』について触れられているが、ヴェーバーはカップの多方面の著作にも親しんでおり、例えばアメリカ西部への入植問題や南部の黒人問題についてのカップの所論を読んでいたがゆえに、後に自身のアメリカ旅行で西部と南部ヘルート変更を敢行したとも言われている。⁴¹⁾ もう一つ、上の手紙でヴェーバーは、カップが死の直前までアメリカの大統領選の行方を気に懸けていて「民主党の勝利だけを救いと見なすことができた」(MWG II/1, 470)と書いている。この選挙では民主党のグローヴァー・クリーヴランドと共和党のジェームズ・ブレインが熾烈な戦いを繰り広げた後、クリーヴランドが辛勝し、南北戦争以来初の民主党政権が発足した。カップはアメリカ滞在当時共和党派だったが、ここでは保護関税政策をとる共和党より、関税引き下げを主張するクリーヴランド⁴²⁾を支持したのだろう（カップはビスマルクの保護関税政策にも反対だった）。ヴェーバーはこうしたアメリカの政治的内情もカップとの交際を通しておおよそ知ることができたのである。

父の旅から10年、カップが推したクリーヴランドが再び政権についた1893年、コロンブスのアメリカ「発見」400周年を機にシカゴで万国博覧会が開催されることになる。ヴェーバーは父やカップに続いて自らの目でアメリカを見ようと、この万博への旅を友人や妹と計画するのだが、結局金銭的事情およびマリアンネとの婚約のために断念せざるを得なかった(vgl. MWG II/2, 25)。⁴³⁾ 彼女に宛てて「シカゴはもちろんあきらめた、僕たちはいつか後年行ってみることにしないか？」(MWG II/2, 340)とヴェーバーは書き送っている。この言葉はさらに10年を経てついに報われることになるが、ヴェーバーの頭の中では長らくアメリカへの旅のシミュレーションができていた。鉄道、産業化、資本主義（精神）、西部（フロンティア、ネイティブ・アメリカン）および南部（黒人）、大統領（選）、そして万博——これら父やカップを通じて開かれたアメリカについての具象的なヴィジョンがセントルイスに向けて旅立つヴェーバーの眼前には浮かんでいた。

マンとヴェーバーにおける「アメリカ」の原イメージは、それぞれの資質を反映してか、概して

41) Scaff [2013], S. 94, 121f.

42) 猿谷 [2017]、93頁参照。

43) Vgl. auch Roth [2001], S. 486.

前者が観念的・情緒的で、後者が具体的・分析的な傾向を示していると言うことができようが、ここで注目すべきは両者の「アメリカ」との関係がもともと「移民」を通じて結ばれたということである。マンの場合は祖父がブラジルへ渡り、そしてそこで生まれた母がドイツへやって来ることで、遙か大西洋の向こうのアメリカ大陸が、メルヒェン的な後光をまとうて現れてくる。ヴェーバーの場合は父のような存在の年長の友人がアメリカ合衆国に長らく住み、ドイツに帰郷して、ヴェーバー家に家族同然に迎えらることで、アメリカがアクチュアルな姿をとって立ち上がってくる。もちろんアメリカは移民の国であって、19世紀を通じて数百万規模のドイツ人がアメリカへ移り住んでおり、当時のドイツではほとんど誰でも親類縁者のなかに一人や二人はアメリカに向けて旅立った人間を持っていたことだろう。⁴⁴⁾ 上で述べることはできなかったが、ヴェーバーも親戚、特に母方の（祖母が異なる）いとこたちにはアメリカへ移住した者、あるいはアメリカで生まれた者がかなり多くいたし、ヴェーバー夫妻がアメリカ旅行の主目的の一つとして彼らを訪ねたことはマリアンネの記述以来よく知られている。⁴⁵⁾ また『大公殿下』はまさしく移民の物語だったが、作者マンにあっても亡命という特殊な事情ながらゆくゆくは自分自身が家族ともども移民になり、最終的にはアメリカ国籍を取得するまでになる。いずれにせよ、マンとヴェーバーにとってアメリカが「移民」という紐帯を持ってドイツとつながっていたし、つながっているということが、彼らの「アメリカ」像の根幹を成していたことは確認しておいてよい。（後編に続く。）

参考文献

- 有賀夏紀 [2002]：『アメリカの20世紀（上）1890年～1945年』中公文庫
生井英考 [2006]：『空の帝国 アメリカの20世紀』講談社
マリアンネ・ウェーバー [1987]：『マックス・ウェーバー』（大久保和郎 訳）みすず書房
クラウス・オッフエ [2009]：『アメリカの省察 トクヴィル・ウェーバー・アドルノ』（野口雅弘 訳）法政大学出版局
猿谷要（編） [2017]：『アメリカ大統領物語 増補新版』新書館
松尾弑之 [2017]：『列伝アメリカ史』大修館書店
トーマス・マン [1988]：『トーマス・マン日記 1935-1936』（森川俊夫 訳）紀伊國屋書店
トーマス・マン [1995]：『トーマス・マン日記 1940-1943』（森川俊夫／横塚祥隆 訳）紀伊國屋書店
トーマス・マン [2000]：『トーマス・マン日記 1937-1939』（森川俊夫 訳）紀伊國屋書店
山口知三 [2006]：『アメリカという名のファンタジー 近代ドイツ文学とアメリカ』鳥影社
山室信高 [2000]：「ネーションとしてのドイツ（？）——第一次世界大戦期におけるトーマス・マンとマックス・ヴェーバーの国民意識の比較（前編）」、『一橋研究』25-2、99-127頁所載

44) 山口 [2006]、36頁参照。

45) ウェーバー [1987]、235-238頁参照。またマリアンネは触れていないが、夫妻はカップの二人の娘とその家族にもニューヨークで会っている。Vgl. Roth [2005], p.93-98.

- 山室信高 [2003] : 「ネイションとしてのドイツ（？）——第一次世界大戦期におけるトーマス・マンとマックス・ヴェーバーの国民意識の比較（後編）」、『一橋研究』28-1、57-72頁所載
- 山室信高 [2012] : 「東方へのまなざし——トーマス・マンとマックス・ヴェーバーのロシア像（前編）」、『人文・自然研究』6、211-240頁所載
- 山室信高 [2013] : 「東方へのまなざし——トーマス・マンとマックス・ヴェーバーのロシア像（後編）」、『人文・自然研究』7、347-387頁所載
- Bahr, Ehrhard [2007] : *Weimar on the Pacific. German Exile Culture in Los Angeles and the Crisis of Modernism*. Berkley / Los Angeles / London (University of California Press)
- Kurzke, Hermann [1999] : *Thomas Mann. Das Leben als Kunstwerk*. München (C. H. Beck)
- Mann, Julia [1991] : *Ich spreche so gern mit meinen Kindern. Erinnerungen, Skizzen, Briefwechsel mit Heinrich Mann*. Hrsg. v. Rosemarie Eggert. Berlin / Weimar (Aufbau)
- Mann, Thomas [1974/1990] : *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*. Frankfurt a. M. (Fischer) = GW
- Mann, Thomas / Meyer, Agnes E. [1992] : *Briefwechsel*. Hrsg. v. Hans Rudolf Vaget. Frankfurt a. M. (Fischer)
- Mann, Thomas [2002ff.] : *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Werke – Briefe – Tagebücher*. Frankfurt a. M. (Fischer) = GKFA
- Mann, Viktor [1994] : *Wir waren fünf. Bildnis der Familie Mann*. Frankfurt a. M. (Fischer)
- Rollmann, Hans [1993] : “Meet Me in St. Louis”: Troeltsch and Weber in America. In: Hartmut Lehmann / Guenther Roth (ed.): *Weber's Protestant Ethic. Origins, Evidence, Contexts*. Washington, D. C. (German Historical Institute), p. 357-383.
- Roth, Guenther [2001] : *Max Webers deutsch-englische Familiengeschichte 1800-1950*. Tübingen (Mohr Siebeck)
- Roth, Guenther [2005] : Transatlantic Connections. A Cosmopolitan Context for Max and Marianne Weber's New York Visit 1904. In: *Max Weber Studies* 5-1, p. 81-112.
- Scaff, Lawrence A. [2013] : *Max Weber in Amerika*. Berlin (Duncker & Humblot) [Original: *Max Weber in America*. Princeton (Princeton University Press) 2011]
- Strauss, Dieter / Sene, Maria A. (Hrsg.) [1999] : *Julia Mann. Brasilien – Lübeck – München*. Lübeck (Dräger)
- Vaget, Hans R. [2012] : *Thomas Mann, der Amerikaner. Leben und Werk im amerikanischen Exil 1938-1952*. 2. Aufl. Frankfurt a. M. (Fischer) [1. Aufl.: 2011]
- Weber, Max [1984ff.] : *Max Weber-Gesamtausgabe*. Tübingen (Mohr) = MWG
- Wysling, Hans / Schmidlin, Yvonne (Hrsg.) [1997] : *Thomas Mann. Ein Leben in Bildern*. Frankfurt a. M. (Fischer)

e-references

セントルイス万国博覧会会場図 (Lageplan des Ausstellungsgeländes. In: *Amtlicher Katalog der Ausstellung des Deutschen Reichs. Weltausstellung in St. Louis 1904*. Berlin (Stilke) 1904) <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/saint-louis1904/0014/image>